

補陀洛の自然相

神野富一

一 はじめに

補陀洛山ふだらくさんはもと南インドの海上、または海辺に存在するとされた観音菩薩の山であった。観音信仰が二世紀ごろ大乘仏教に取り入れられるとともに、補陀洛山も『華嚴經』などの經典類に理想化されて描かれた。そして補陀洛思想の展開はそれにとどまることなく、その經典類の記述を媒介として、また直接的に海上ルートで伝えられたことによって、東アジアの各所に観音靈場として現実の補陀洛山を成立させた。中国の普陀山ふだくさん、韓国の洛山、日本の熊野那智や日光などである。またそれらほど著名でなくとも、たとえば島原半島南端の岩戸山や紀伊水道の伊島などのいわば小補陀洛も各地に成立した。さらに、縁起に当所は補陀洛山であると伝える寺院や、「フダラク」を寺名や山号にもつ寺院も各地に建立された。以上の現実化した補陀洛山は本来の補陀洛山の「写し」であり、ある程度の多様性をもつ補陀洛山観念のうちの一型として位置づけられる。

(1) さて、それら「写し」としての補陀洛山が成立するときには、興味深いことには、どの国や地域においても、必要とされた共通の条件らしきものがあつたらしい。補陀洛山はどこにでもつくられたのではなかった。ただ観音像が祀られてさえいけば、その場所がただちに補陀洛山とされたのではなかった。その共通の条件の一つが、多分に主観の入り混じる余地や解釈の自由はあつたにしても、その土地の自然相（自然景観）が本源の南インドの補陀洛山、または經典類の描いている補陀洛山に類似していることであつたと考えられる。

「写し」としての補陀洛山が自然相において經典類の補陀洛山に類似していることは、以下にもみるように各地の補陀洛山・寺院の縁起や地誌類にも散見することであるし、また個別的には今までも論者によって指摘されてきたことではあるが、ここではその点について個別と全体とを眺め渡しながら総合的に記述することを試み、またそのことの信仰的意味を探ってみよう。

二 經典類における補陀洛の自然相

では經典類に描かれている補陀洛の自然相とはいったいどのようなものか。

『法華經』『普門品』には、直接観音の住所について述べた個所はない。しかしいわゆる七難の救済を説く条のうちに、

若し大水のために漂わされんに、その名号を称となえば、即ち浅き処を得ん。若し百千万億の衆生ありて、金・銀・瑠璃・砗磲・碼瑙・珊瑚・琥珀・真珠等の宝を求めんがために大海に入らんに、仮使たとひ、黒風その船舫ふねを吹きて、羅刹鬼の國らさつきのくにに飄たなわし墮しめんたに、その中に若し乃至一人ありて、觀世音菩薩の名なを称となえば、この諸の人等は皆、羅刹の難を解脱まぬることを得ん。¹⁾

と大水の難・羅刹の難を詳しく説いている一節がある。この個所は「普門品」の成立時に現実に行われていた南インドとセイロン島との海上貿易に従事する人々の観音信仰を叙したものと推定され、もつてこの個所は「補陀洛山を以て観音菩薩の住処となした所以」²⁾ともいわれるように、海上守護の観音信仰としての補陀洛信仰の発祥のようすがわがわする。ここでは補陀洛山は、海のイメージが卓越して

いる。

八十卷『華嚴經』(卷六十八)には、善財童子が訪ねた「補陀洛迦」山について、海上に山有りて聖賢多し。衆宝成す所極めて清浄なり。華果樹林皆遍満し、泉流池沼悉く具足す。勇猛丈夫觀自在、衆生を利す為に此の山に住す。(以上、頌。中略)其の西面の巖谷の中を見れば、泉流繁映し、樹林翳鬱し、香草柔軟にして、右に旋りて地に布く。觀自在菩薩、金剛寶石の上に結跏趺坐したまひ、無量の菩薩は皆寶石に坐して恭敬圍繞す。為に大慈悲の法を宣説し、其れをして一切の衆生を摂受せしむ。

とある。その自然相は海・山・衆宝・華果樹林・泉流池沼・巖谷・香草・金剛寶石などで表象、莊嚴されている。六十卷『華嚴經』(卷五十一)のその対応箇所を見ると、

觀世音菩薩の山西の阿に住むを見る。処々皆流泉浴池有り。林木鬱茂し、地草柔軟なり。金剛宝座に結跏趺坐し、無量の菩薩恭敬圍繞す。為に大慈悲の経を演説し、普く衆生を摂す。

とあり、自然相はやはり山・流泉浴池・林木・地草・金剛宝座などで表象されている。そして、この『華嚴經』の形象を受けて密教経典にも補陀洛山の自然相を描写するものがある。たとえば『不空羼索神呪心経』では、種々の宝樹・香花軟草・宝泉池沼・無辺の異類禽獸などが補陀洛山を莊嚴している。『陀羅尼集経』(卷二)の、

〔補陀落伽山は〕海島と云ふも、別の角度からの一つの表現であった。こうして経典には、補陀洛山は海島であり、樹林や草が繁茂し、巖谷があり、川・泉・池などの水の表象にも富む、清浄なる場所として描かれている。またその中の金剛寶石が觀音の坐す場所であった。

経典ではないが、『大唐西域記』(卷十)には、
山徑危險、巖谷峻傾。山頂に池有りて、其の水澄鏡なり。大河を流出し、周流山を繞ること二十匝にして南海に入る。池の側に石天宮有りて、觀自在菩薩往來遊舎したまふ。

とあり、山・巖谷・山頂の池・周流する大河・石天宮の表象がみられ、大河は南海に注いでいる。これは六十卷『華嚴經』の叙述をさらに敷衍したものらしくもある

が、山もその他も全体に広大化している。また山頂の池が大河を流出し、山を二十周もして南海に入るという描写は補陀洛山が大いなる水源地であったことをあらわし、その教主たる觀音が水の神、豊饒の女神の属性をもつことを暗示している。この『大唐西域記』の「布呬落迦山」の叙述が、また各地の補陀洛山の出現に大きな影響を与えた。

以上の経典類に説く補陀洛山の自然相をまとめてみると、

海・山・衆宝・華果樹林・泉流池沼・巖谷・香草・金剛寶石(八十卷『華嚴經』)

山・流泉浴池・林木・地草・金剛宝座(六十卷『華嚴經』)

海島(『陀羅尼集経』)

山・巖谷・山頂の池・周流する大河・南海・石天宮(『大唐西域記』)

となる。すなわち、補陀洛山は海島ないし海岸の山であり、泉や池を擁し、樹草が繁茂し、巖谷があり、そして、川を流出している清浄なる場所である。

三 各地の補陀洛山の自然相

さて、ややくだくだしいが、以下には各地の「写し」としての補陀洛山を取り上げて簡潔にその自然相にふれ、それを本来の補陀洛山の自然相と対比させてみよう。ただし、以下に取り上げる補陀洛山は、各国で代表的とされる補陀洛山、地方的と考えられる補陀洛山の二、三、および縁起に当所は補陀洛であるとすする寺院や、補陀洛を寺名や山号にもつ寺院の数例であって網羅的ではない。チベット、ラサのポタラ山についてもここではふれない。また、以下の記述においては、必要に応じてその地理上の位置・現況・開山伝承などにも言及することにする。

普陀山(中国)

杭州湾の沖に浮かぶ舟山群島の中の一島。島は周囲二十二キロメートル余り。山がちで、海岸は岬が多く、浜もあるが険しい崖が続く。島内には觀音に關係づけられている自然の洞窟や奇岩怪石が非常に多い。まずは、海島であることとその自然のありさまが、普陀山を補陀洛に擬する有力な因となったかと觀察される。近年地

元で刊行された『普陀洛迦山志』も、普陀山の自然環境が諸経に説く観音の聖地と相似していることが早くから気づかれて観音信仰が起こったと考察している⁸⁾。

咸亨五年（一二六九）の成立の『仏祖統紀』（巻四二）は、普陀山が補陀洛山であることについて次のように述べている。

山は大海中に在り。鄞城を去ること東南水道六百里。即ち華嚴に「南海岸の孤絶処に山有りて補陀落迦と名づく。観音菩薩其の中に住みたまふ」と謂ふ所なり。即ち大悲経に「補陀落迦山、観世音宮殿。是釈迦仏に對ひて大悲心印を説く為の所」と謂ふ所なり。

普陀山は、『華嚴経』や『大悲経』に説く観音の住所、補陀洛山その所にほかならないというのである。世に補陀洛と伝える場所は、そのいわれとして観音示現の場所だからと説かれたり、熊野那智のように「補陀洛山の東門」と説かれたりしているが、普陀山はそうではなく、そこそが經典に説く補陀洛、その場所であるという。このことはすでに『乾道四明図経』（巻七）にも、

山の後に一小寺有りて観音と曰ふ。釈典の載する所を按ずるに「観音宝陀山に住みたまひて海岸孤絶処に在す」と。即ち其の所なり。

と説かれ、後の山志でも繰り返して語られている。

さて『仏祖統紀』では、先の記述に続けて、普陀山には「潮音洞」という洞窟があつて、時としてそこに観音が現れるとしている。「南海岸の孤絶処」という地理的位置と、洞窟（巖）のイメージが意識的に經典類の記述に重ねられている。『大唐西域記』にみえる「石天宮」が洞窟のイメージを喚起していることも注意しておいてよい。以下にもふれるが、洞窟が観音の居所とされる補陀洛山は数多いのである。

「潮音洞」は現在でも普陀山の名所になっており、海岸の岩場に開いた海食洞窟である。その特異な造形や現象に古人は不思議を感じ、観音の住所と観じたのであろう。中国で、古来洞窟に女神の存在を考えてきた伝統的観念が背景にある。

海・島・山・洞窟・樹草などの自然相が經典類の補陀洛にかよう。

洛山（韓国）

韓国江原道襄陽郡の、広大な東海（日本海）に面した小高い丘の上に洛山寺がある。その開山伝承を説く『三国遺事』の一節（巻三、「洛山二大聖 観音 正趣 調信」の項）には、咸亨二年（六七二）に留学先の唐から帰った義湘法師が、大悲（観音）の真身がこの海辺の窟の内に住していると聞いて訪れ、洞窟内で観音の真容を見ることができた、またそこを洛山と名づけた、とあり、やはり海辺の洞窟が観音の居所とされている。その「聖軀」は義湘が座具を海水に浮かべて中に入っていたり、後に当地を訪れた元暁が激しい風浪に阻まれてそこに入ることができなかったと書いていたりするところからすると、海辺の、波が寄せるような洞窟であつたらしい。洛山には現在もそれだと伝える「観音窟」がある。普陀山の「潮音洞」とよく似ており、この点は洛山信仰が普陀山信仰の伝播・移植であることの有力な証拠の一つである。

海・山・洞窟などの自然相が經典類の補陀洛にかよう。

なお、「洛山」という命名について、『三国遺事』には、

蓋し西域の宝陀洛伽山、此れを小白華と云ふ。乃ち白衣大士真身住む処なり。

故に此の名を借りしなり。

といい、洛山が「西域」（インド）の補陀洛山の「写し」であることが自覚的に述べられている。

熊野那智

那智の原始的な信仰は瀧への信仰にあつたろう。その瀧は那智の浜から五、六キロばかり入った山中にあり、樹木生い茂る山中には第一の瀧以外にも大小の瀑布が多く、「四十八瀧」と称される。信仰の中心的な場所は古くから第一の瀧の下、滝本にあり、那智権現は瀧から東方約二・五キロにある光ヶ峰から飛来したという。

また海上に現れた千手観音が川伝いにやってきて瀧に現れたという伝承もあり、瀧の信仰は山や海ともつながっている。

『平家物語』には、

明日の社ふしおがみ、佐野の松原さしすぎて、那智の御山にまいり給ふ。三重

に漲りおつる瀧の水、数千丈までよぢのぼり、観音の霊像は岩の上にあらはれて、補陀落山ともいッつべし。⁴⁴⁾

とある。やはり、瀧を中心に山や岩の描写によって補陀落山との類似がいわれている。

また、白砂敷く那智の浜は、藤原宗忠の『中右記』に「補陀落の浜」と呼ばれている(天仁二年(一一〇九)十月二十七日条)。浜の上手には補陀洛山寺が建ち、その住僧たちも含んで、平安時代以降この浜からは時々補陀洛渡海が行われた。この那智の浜やその海も、補陀洛那智を構成する重要な自然である。

瀧・山・岩・樹草・川・海などの自然相が經典類の補陀洛にかよう。

那智が補陀洛たるにふさわしい自然景観をもつことについて、根井浄氏の印象深い文章も引いておこう。

実際に那智湾の沖合に出て海上から那智山を見上げると、山容は八角形の宝殿を彷彿とさせ、山肌には那智の滝筋が見える。大空の青に染まず、白い垂直な那智の滝の線は美しい。そして滝の水は麓の海岸に注ぎ込むのである。『華嚴経』や『大唐西域記』が説く地形に似つかわしい。補陀落とは山と海の上下を貫くこの景観をとおして初めて実感することができる。那智山と海岸の全景がすなわち補陀落世界と認識されていた。補陀落渡海は、ここから発祥し、ここでおこなわれた。⁴⁵⁾

別稿を予定しているが、那智にはまず海上ルートによって、古く七世紀ごろに東アジアの海で行われていた補陀洛信仰が伝播、定着したと考えられる。その際、海からの視点は重要であった。

日光

男体山を補陀洛山とする。海辺の山ではないところが、經典類の補陀洛山とも、これまでみてきた補陀洛山とも異なる。けれども、中禅寺湖をひかえ、華嚴の瀧を流出させるその自然景観は、特に『大唐西域記』の「山径危険、巖谷鼓傾。山頂に池有りて、其の水澄鏡なり。大河を流出し、周流山を繞ること二十匝にして南海に入る」という個所を想起させる。

空海の「沙門勝道山水を歴て玄珠を鑿く碑」の碑文にも、「洛山の記」として、男体山および男体山頂から眺めた三つの湖、中でも南湖(中禅寺湖)の勝景がとくに詳述されている。空海の筆には補陀洛の景観が明確に意識されていた。その後、貞観十八年(八七六)ごろの成立とされる『二荒山千部会縁起』にも、

夫の山中を觀るに、鏡湖有り。湖岸に仏寺有り。寺中に法会有り。会中に衆僧有り。洞庭に到るが如く、蒼闥嶺に似て、補陀洛山ならんかと疑ふ。⁴⁶⁾

とあり、二荒山を「補陀洛山ならんかと疑ふ」のにやはり鏡湖(中禅寺湖)の存在にふれている。また保延七年(一一四一)成立の『中禅寺私記』にも、中禅寺湖の西岸の祭祀に関して、

湖の西岸に十六丈の千手觀音の石像有り。千手崎と曰ふ。山門の題額に「補陀洛山発心壇門」と書す。是則ち山勢の相似を為すに依りて、觀音利生の場なり。件の額は弘法大師の手書なり。⁴⁷⁾

とあり、「弘法大師の手書なり」というのは伝承にすぎないとしても、「山勢の相似を為すに依りて」そこが補陀洛山とされたという見方がみえる。近世の『坂東三十三所觀音靈場記』にも、作者亮盛は、「補陀落や上りて拝む湖水の岸に立木の誓ひひさしき」という巡礼歌を挙げた後に「山の頂に池有り。その水澄鏡にして、大河をわかち出だす」などの『西域記』の一文を引用して自然相を対照している。

中禅寺湖は海に擬されているふしもある。近世に行われていた行事の一つ、「浜禅頂」は中禅寺湖を船で巡るものであったが、その船の一種を「補陀洛船」と称した。

山・湖・巖谷・川・瀧・樹草などの自然相が經典類の補陀洛にかよう。

岩戸山

島原半島の南端近くに位置し、現南島原市加津佐町に属する。長い浜辺の間に突兀と海に突き出している小山である。東シナ海に面していることも注意される。証明はできないものの、古く補陀洛信仰が海路によってここに運ばれ、定着した可能性もあるからである。

ふもとから少し登った所に巖吼寺があり、南北朝時代に開かれた円通寺の後身と

いう来歴をもつ。そこから数分、狭い急な参道をたどると、秘密の場所のような、海に面した中腹の洞窟に到る。内部は直径十メートルほどのドーム状の洞窟で、奥の方の簡素な祠に観音像が祀られ、「穴観音」と称されている。三十三観音の一つに「岩戸観音」があり、岩戸（洞窟）の中に観音を祀る形象をとるが、「岩戸山」の呼称も「穴観音」の形象もそれによったものだろう。

根井浄氏は、ルイス・フロイスの『日本史』のこの岩戸山に関する記述などを引きながら、

岩戸山は洞窟に祀られたアナ観音を中心とする観音巡礼の霊場であった。かつて大智禪師が開いた円通寺の山号を補陀山といい、現在の巖吼寺の山号を普陀山というのは、まさしく観音浄土の補陀落信仰に拠るものである。中世末期の岩戸山は雲仙の麓に広がる海岸部の観音霊場であったということができるだろう。（中略）岩戸山は雲仙修験の海岸行場であり、有明海における観音信仰の霊地であったのである。また、対岸の熊本天草地方から岩戸山を眺めると、そこは観音浄土の異界として意識されていたに違いあるまい。

と述べている。那智や日光と比べると規模は小さいながらも、しかしかつては雲仙修験とかかわって広く信仰を集めた一つの補陀洛山にほかならないのだった。それにくさわしく、海島・山・巖谷・樹草の優越する自然相である。実際に海に面した山の中腹の洞窟の中に身を置き、観音像に対したり海からの光を眺めたりしていると、『大唐西域記』に描かれたような壮大なインドの補陀洛山の日本的なミニチュアの中にいるような気がしないでもない。ミニチュアだけでも道具立てはそろう、神聖なのである。

なお、岩戸山は陸地の南端に位置して南海に面するという点も本来の補陀洛山に類似する。その点では薩摩半島南端に位置する開聞嶽も同様であり、そして開聞嶽も近世には補陀洛山といわれていた（『開聞古事縁起』）。

伊島

紀伊水道に浮かぶ周囲約十二キロメートルの島。源為憲の『空也誄』（九七二、三年ごろ成立か）に、

阿波土佐兩州の海中に湯島有り。地勢靈奇にして、天然幽邃なり。人伝ふるに観世音菩薩像有りて、靈驗掲焉なり。上人観音に値はむが為、故こゝろに彼の島に詣づ。（下略）

とあり、修行時代の空也が観音に会いに「湯島」（伊島の古名）に渡り、腕上焼香などの苦行の末について観音の真身を見ることができたのである。『空也誄』に湯島は補陀洛なりと述べているわけではないが、平安末期成立の『梁塵秘抄』の一首には湯島を「南海補陀落の山」とするらしき歌があり（巻二、三二五）、『空也誄』にも「人伝ふるに観世音菩薩像有りて、靈驗掲焉なり」とされた湯島は、古代のある時期、補陀洛の一つとみなされていたと考えられる。現在も伊島では空也上人作と伝える観音像を中心に観音信仰がさかんで、それは一千年以上も続いてきたことになる。

その湯島の自然相を『空也誄』は「地勢靈奇にして、天然幽邃なり」と讃え、そのゆえに靈驗あらたかな観音像が祀られたとする書きぶりである。実際伊島の自然相は、平地乏しく崖や岩場に富んで、まるで同じ海島である普陀山の相似形のようなのである。

南海にあって、島・山・巖谷・樹草などの自然相をもつことが経典類の補陀洛にかよう。

芦ノ湖の島

箱根もまた日光に似て山と湖が秀景をなす。建久二年（一一九一）成立の『管根山縁起并序』にはまずその景観が美文をもって讃えられている。そして皇極朝に「玄利老人」という修験者が箱根山を管するようになったが、「次齊明天皇時、玄利建三寺于彼島」。島有「北面怪岩」。自是大悲尊容也。因名「補陀洛迦山」。つまり芦ノ湖中の島の北面に怪岩あり、それが観音の姿そのものであったため、島は「補陀洛迦山」と呼ばれたという。さらに聖武朝には一寺を建立して大悲尊像を安置した。こうして中世には、箱根にも補陀洛山があるとして信仰されたのだった。観音の姿が岩に現れているとするのは、『平家物語』に「観音の霊像は岩の上にあらはれて」といわれた那智の瀧の場合と同じである。観音が補陀洛山の金剛宝座に

結跏趺坐するという經典のイメージと岩石の形に靈性を見出す古来の岩石信仰が重なったものだろう。

ここでは芦ノ湖が海に、湖中の島が補陀洛山になぞらえられている。湖・島・岩。

以上、代表的また地方的な「写し」としての補陀洛山をいくつか取り上げてきたが、規模の大小はあっても、それらは自然相において南インドの補陀洛山、または經典類の描いているそれに似通った場所であることがわかる。その成立時においては、個人や衆の信仰体験を通じて南インドの補陀洛山または經典類の描いているそれに似通った場所が選ばれ、いったん補陀洛山として成立してからも時としてその自然相がそれらの補陀洛山に近いことが反芻されつつ信仰が持続されてきた、というようすがみてとられる。自然相の類似をいわば有力なパスポートのようにして各地に補陀洛山が成立していったのである。

四 補陀洛を称する寺院の自然相

次に、縁起の中にその場所を補陀洛山と関係づける日本の寺院の例をいくつか挙げよう。

補陀洛山粉河寺は縁起に宝亀年間の草創を伝える。獺師の同伴孔子古が山林の幽谷中に光明を見て、その地に千手観音像を祀った。平安中期ごろには、粉河寺は「吾朝の補陀洛山也」、また「彼所こそ生身の観音の住給所也。又補陀落海の浪、御堂の内陣に起つといふ」といわれ、また境内の霊地の一つが生身の観音が出現した場所であるといわれた。十一世紀なかばごろ、仁範上人が記した縁起の注には、

其の地勢を相るに、天下に甲^すれたり。其の風煙を觀るに、海内に絶せり。朱雀は前に開き、万里の波漫々、遙かに補陀落海の新月を迎ふ。玄武は後に峙ちて、千年の緑蒼々、遠く蒼巖嶺山の旧風を移す。

とあり、また十二世紀中ごろにも錦織僧正が、「此所は大聖遊化の靈地也。此砌は海岸孤絶の宝嶺也」という微妙の声を聞いたという。

『粉河寺縁起』は、粉河寺がたんに観音像を祀るばかりでなく、「生身の観音」

の住所であるとして、またその海や岩屋の自然がふさわしいとして、補陀洛山たることを強調しようとしている。特に「補陀落海の浪、御堂の内陣に起つ」また「万里の波漫々、遙かに補陀落海の新月を迎ふ」として、かの常世波のように海での補陀洛山とのつながりが強調されている。

『醍醐寺縁起』(承平七年(九三七)以前成立)では、如意輪観音が示現して、此の山は補陀洛山なり。則ち此の道場は、彼の補陀洛山の中心にして、金剛宝葉石有り。我此の上に坐して十方世界の衆生の苦業を觀照し、昼夜常に拔苦与樂せん云々。

と語ったとしていて、まさに『華嚴經』の観音説法の情景がそのまま襲われているようだ。『石山寺縁起』(正中年間(一三二四〜一三二六)成立)では、

此山の上に大なるいはほあり。八葉の蓮花のことく、紫雲つねにたなひきて、瑞光しきりにかゝやく。観音利生の砌、地形勝絶の境なり。と、地主神、比良明神に語らせ、また天智朝ごろのこととして、

山の半腹に八葉の巖石あり。奇雲そひきくたりて帯をなせり。誠大聖垂迹の勝地なりといへり。みれば前に池あり。八功德池の流をうけて、弘誓のふかき法をおしへ、後に山あり。補陀洛山のかたちをうつして、大悲のたかきめくみをあらはすものなり。

と描いている。巖石・池の表象が語られるばかりでなく、後方の山が補陀洛山の「写し」であることが自覚されている。「八葉の蓮花のことく」とは、『不空羂索神變真言經』卷十五の「出世解脱壇像品第二十六」に、「山は九嘴の状有りて蓮華を開く。其の心嘴に当たるは田大平正。……」とあるのなどに拠り、「みれば前に池あり。八功德池の流をうけて、弘誓のふかき法をおしへ、……」は『不空羂索神呪心經』に、「(山には)復た無量の宝泉池沼有り。八功德水其の中に弥漫す。衆花映飾し、甚だ愛樂すべし」とあるのなどに拠る。

このほか、『清水寺縁起』でもそこが補陀洛山であることがおわせられている。このようにそれら著名な観音寺院の縁起においても、やはりその自然相を經典類の記述に似せようと描写していることがわかる。各観音寺院にとっては、自然相の類似こそ、そこが補陀洛山であることの有力な保証なのであった。

伝えにそこを補陀洛山とするのではないが、古くに補陀洛の寺号をもった京都市内静原の補多楽寺（補陀落寺）の場合も取り上げておこう。静原の補多楽寺は、天慶年間、清原深養父の住居跡に延昌（天慶四年〔九四一〕）に天台座主となった）によって建立されたと伝える。『門葉記』によれば、幼くして叡山に登った延昌が、「更に幽閑の処を尋」ねて歩いたところ、山北の嶺に一道場を得て明燈寺と名づけた。後、延昌は他に移り住んだために荒れ果ててしまったのを、天慶八年に至って花堂を草創し、八尺の十一面観音像ほかの尊容を造って安置し、寺名も旧を改めて「補多楽寺」とした。そのゆえは、「蓋し観音を以て主と為すに依りてなり」という。¹⁰³この寺はフダラク寺を号した早い例であり、応和三年（九六三）には御願寺ともなつて往古は著名な寺院でもあったから、後世各地に陸続と現れたフダラク寺の命名の際の一つのモデルになったかもしれない。

この補多楽寺の場所については従来いくつかの説があったが、発掘調査によって静原町の通称「クダラコジ」山と呼ばれる山中の遺跡がそれであるとされる説が今では有力となったようだ。¹⁰⁴そこは人里を離れた、谷筋に沿う急な南向きの斜面であるという。この寺の場合も、観音像を祀り、補多楽寺と命名する際に、經典類に描かれる補陀洛山の自然相が意識された可能性はある。

坂東観音霊場の第三十三番とされる安房の那呉寺も、近世には「我が日本の補陀洛山なり」とされた寺である。¹⁰⁵縁起の文ではないが、那呉寺を実見した亮盛は感動をもってこうしている。

愚訥この山の地景を見るに、経説の補陀洛に相似たり。山高く海岸に聳へ、山下は南海の潮にひたり、昼夜に岸打つ浪の音は、梵音海潮音の響きにして、まことに余所に求むべきに非ず。大悲の浄土はこの山なりと、しきりに感信して拝見しき。後に万国掌葉の図を見るに、天竺南印度の南涯、林羅矩吒国の南、棘刺耶山の東、布咀羅迦山あり。那呉、これに似たり。

この亮盛の筆致には近世人らしい合理的思考がみられるにしても、山海のありさまに補陀洛山を重ねる、そのまなざしは深い伝統に拠るものにちがいない。

さて、補陀洛山の中には、熱烈な修行者によって「発見」されたものもあった。たとえば、補陀洛渡海を挙行した日秀上人が、漂着した先の琉球の金武を補陀洛と

観じて観音寺を建立した場合である。

日秀上人は一五二〇年代、おそらく那智から渡海して琉球の金武郡にたどり着き、そしてそこをまさに補陀洛と観じた。その時の上人の感得は、『琉球国由来記』によれば、「上人自ら心を安んじ、歎きて曰く、誠に補陀洛山たることを知る。又何所に行き、之を求めんや。錫を留めて安住せん」というものであり、「誠に補陀洛山たることを知」ったその根拠は、山や湖のありさま、中でも龍宮へと続く深い洞窟こそが観音の住処であるからだという。¹⁰⁶日秀上人が金武を補陀洛とみなしたことがたんなる伝承でないことは、後に薩摩に渡った上人が、坊津の一乗院に安置した釈迦如来の心柱に上人自身が「本願日秀上人、從補陀洛來作之（補陀洛より來たりて之を作る）、上野国住人」と銘を書きつけていることによってたしかめられる。補陀洛渡海という極限の信仰実践を通じて、日秀は琉球の地に補陀洛を自ら「発見」したので。そしてその補陀洛たる保証は、やはりその自然相にあったのである。

日秀上人の場合はやや特異な例であるにしても、以上に挙例したような寺院縁起の類から読み取れるのは、観音を祀る場所がしばしば「写し」としての補陀洛山とされたことであり、そしてその場合に本来の補陀洛山と似通う自然相が強く意識されたことである。観音寺院の立地にも関係することだが、ある所に僧や信者によって観音が祀られ、その地の地勢が補陀洛山にかようと語られる、逆に地勢が補陀洛山にかような場所が選ばれて観音を祀る寺院が建立される、いずれの場合もあつたろう。

五 信仰上の意味

各地の補陀洛山の自然相が經典類に描かれた補陀洛山のそれと類似している、あるいは類似しているとされてきたことを例を挙げて確認してきた。結果として、自然相の類似は、ある場所が補陀洛化するときに共通の必要条件となつたと推測される。

そしてこの自然相の類似ということは、「見た目の自然」の類似というたんに表面的な意味にとどまらず、信仰上の深い意味を蔵している。

まずその自然は清浄であり、聖なるものの顕現であること。各地の補陀洛が語られるとき、経典類に描かれた補陀洛山と同じ自然の要素を言い立て、並べ立てるのは、本来の補陀洛山に存する聖性とその表象としてその地にも顕現していることをいうためにほかならない。自然の中に聖性を感じ得る信仰者の直観が、詩人のように類似を発見していったのだ。本来の補陀洛山は雄大で清浄な自然として語られていた。そして各地の補陀洛山の自然は、しばしば総合的に「勝地」「勝絶」などの言葉で讃えられている。信仰者たちは、日秀上人の場合によくあらわれているように、信仰実践の中で各地の自然に本来の補陀洛山と同じ清浄さ、聖なるものの顕現を感じていったのである。

また、その自然は豊饒の性格をもつということ。「海・山・池・泉・樹草・巖谷・川」などで表象され、巨大な水源地としても描かれた補陀洛山の自然は、清浄さとともに豊饒の景をもあらわしている。その教主たる観音は水の神、豊饒の女神としての原像をもつので、その山は女神住まう一つのユートピアの一面をもつ。

観音が秘めている豊饒の女神としての属性は観音信仰が東アジアに広まったときにも伝えられ、中国では観音が中国古来の豊饒の女神たちと習合する大きな契機となった。その女神とは、女媧など「人間の増殖と自然の豊饒とを主る盛産女神」たちで、その本体は「蛇」であり、その住所は「樹木鬱蒼と繁茂し、陰崖に泉湧き瀑布奔り、朝暮に雲雨催して、風は悲しく鳴くというような、ただならぬ秘域」「幽境」であった。それら女神と観音との間には、「明らかな一致、興味深い対照、ないし密接な連繋がある」と小林太市郎氏は考察している⁸⁾。

観音が豊饒の女神として受容され、それにふさわしい自然の場所に祀られたことは日本の場合にもいえよう。長谷寺の建立された「こもりくの泊瀬」の自然相の意味について、西郷信綱氏は、その「山、水、岩などは大地にぞくするものとして、神話的にはみな母性原理をあらわすイメージ」であり、「豊饒の源たる母胎を意味した」とし、そしてそれを体現していた地主神たる女神滝蔵権現にやはり地母神としての観音が重なっていった、と述べている。またそれを一般化して、日本の観音の圧倒的多数が山地の岩場に示現したとされる宗教的な意味についても、「山、岩、洞窟、水等ほみな女性原理、いっそう正しくは母性原理を象徴する映像」であり、

「この原始の母性に観音というあたらしい母性形式が重なり、後者によって前者はとって代られ、前者は後者の地主神として多くは埋没、または後景に退いた」とまとめ、さらに観音の功德にもふれて、「観音信仰に固有ないわゆる現世利益が、地の豊饒という原始的観念のあらたな変形に他ならない」とまで言及している⁹⁾。沼義昭氏もまた、主に寺院縁起の類を広範に調べるといふ方法で、観音信仰と山・水源地・岩・泉・洞窟信仰や水神信仰との深いかかわりを説いている¹⁰⁾。

南インドの海島または海辺の山から飛来して、東アジアの多数のよく似た山を選んで降下し、住みついた観音菩薩の分身たち——こんな不思議なイメージすら浮かぶほど、たしかに観音は東アジアの各国において多くの山に祀られている。そこにはたいてい目立った岩場があり、水が流れ、樹草が豊かに繁茂している。各地の補陀洛における自然相の類似ということも、そのような豊饒の女神の信仰と深い関係があったのだ。

一方、海・海島という補陀洛の海の要素についても、海の龍神信仰を介してやはり水の支配と豊饒に関係する。ただこの点は、別に詳しい検討を必要とする。

なお、ここではあまりふれられなかったが、自然相にも関連して、各地の「写し」の補陀洛の地理的位置や方位の類似も注意される。経典類の補陀洛山ではそれは南インドの海島ないし海辺とされたが、主な「写し」としての補陀洛山は、

普陀山——中国中部の東方 洛山——朝鮮半島中部の東海岸

那智——紀伊半島の南東部 日光——北関東の山中

にある。三箇所は東または南の方位にあり、日光もまた山地の東端にある。岩戸山は島原半島の南端、開聞嶽も薩摩半島南端にあり、紀伊水道に浮かぶ伊島も淡路島から見て「南は南海補陀洛の山に對ひたり」(『梁塵秘抄』卷二、三二五)とうたわれたように「南海」にあるとされた。方位はどこを基点にするかによって異なるわけだから一概にはいえないが、ある国や地域の東や南の海辺(日光は山地の縁)に補陀洛山が成立した場合が多いことは観察される。

東は日の出の方位であり、南は日の射す方位である。そして東や南は太陽信仰の濃度の高い土地である。

注

- (1) 坂本幸男・岩本裕訳注『法華経』（岩波文庫版、一九六七年）による。
- (2) 松本文三郎「観音の語義と古代印度・支那に於ける其信仰」（『仏教史雑考』所収、一九四四年。初出は一九三〇年）。
- (3) 普陀山仏教協会編、王連勝主編『普陀洛迦山志』一六三頁（一九九九年）。
- (4) 『平家物語』巻十、「熊野参詣」。日本古典文学大系本による。
- (5) 根井浄『補陀洛渡海史』八一・八二頁（二〇〇一年）。
- (6) 『神道大系 神社編三十一 日光・二荒山』六一頁。
- (7) 注(6)の書、七〇頁。
- (8) 注(5)の書、四〇九・四一〇頁。
- (9) 『宮根山縁起并序』（山岳宗敎史研究叢書17『修験道史料集（I）』東日本編）所収、一九八三年）。
- (10) 以上、『粉河寺縁起』。日本思想大系『寺社縁起』所収。一部表記を改めた。
- (11) 『醍醐寺縁起』。原漢文。大日本仏敎全書八三所収。
- (12) 以上、『石山寺縁起』。大日本仏敎全書八六所収。
- (13) 以上、『門葉記』巻百三十四。大正蔵図像部十二所収。
- (14) 梶川敏夫「京都静原の補陀落寺跡——平安時代創建の山岳寺院跡——」（『古代文化』四二、一九九〇年三月）。
- (15) 亮盛『三十三所坂東観音霊場記』。
- (16) 金指正三校註『西国坂東観音霊場記』三五六頁（一九七三年）。
- (17) 『琉球国由来記』巻十一。「金峰山観音寺」の項に引かれる「金峰山補陀落院観音寺縁起」。琉球史料叢書本による。
- (18) 小林太市郎「女媧と観音（完）」（『仏敎芸術』二、一九四八年十二月）。
- (19) 西郷信綱『古代人と夢』第三章「長谷寺の夢」（一九七二年）。
- (20) 沼義昭『観音信仰研究』第一章「長谷寺の観音信仰——一つの元型のために」・第二章「山と水と観音」（一九九〇年）。

The natural landscape of Fudaraku

KANNO Tomikazu

Abstract : In the case when Mt. Fudaraku, the place where Kannon lives, was formed in various places, the similarity of the natural landscape of original Fudaraku operates as a condition. In this paper, I studied about this connection, and also, about the religious meaning of it. The original Mt. Fudaraku explained in the Buddhist scriptures is sacred and fertile mountain which has both marine and mountain elements. I proved that the landscape of it was copied to other Fudarakus formed in various places.